



TITLE:

[書評]Albert Camus, Carnets III,
Gallimard, 1989

AUTHOR(S):

奈蔵, 正之

CITATION:

奈蔵, 正之. [書評]Albert Camus, Carnets III, Gallimard, 1989. 仏文研究
1991, 22: 75-79

ISSUE DATE:

1991-09-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/137772>

RIGHT:

Albert Camus, *Carnets III*, Gallimard, 1989

奈 藏 正 之

久しく刊行が待たれていたカミュの『手帳3』（*Carnet III, mars 1951—décembre 1959*）がようやく書店の店頭にならんだのは、1989年5月のことである。当時滞仏していた筆者には、積み上げられた本のオフ・ホワイトの表紙と、〈vingt ans d'inédit〉と白く抜かれた赤い帯が、今だに強い印象として残っている。

1935年から死の直前まで、カミュは9冊のノートをつけ、それを〈cahier〉と呼んでいた。作者の死後、R. キイヨが中心となってこのノートを校訂、3冊ずつ1巻にまとめて全3巻で出版することになり、折から企画中だった〈Cahiers Albert Camus〉シリーズと区別するために、出版社は〈Carnets〉と名付けた。こうしてカミュの『手帳』は1962年に第1巻、64年に第2巻と刊行されたまではよかったのだが、第3巻に至って発刊が滞り、ついに25年間の空白ができてしまった。スキャンダルを避けることをカミュの遺族が望んだということが、その理由らしい。すでに『手帳2』において存命の人物に迷惑がかかるということから、刊行者による18行の削除が1ヶ所、人名の匿名化が数ヶ所認められた。『手帳3』においても、同様に固有名詞がかなり隠されているが、それ以上に、作家の「栄光」を傷付ける恐れのある生々しい記述が目立つ。そうした記述を人目に触れさせまいとした遺族の気持ちは理解できるものの、カミュ研究に及ばされた25年間の資料的空白は極めて残念である。

ようやく刊行された『手帳3』は第7～第9ノートを収め、第8ノートに付された手紙の草稿およびメモも収録されている。第7ノートは、カミュの生前にタイプ原稿にされていたようで、手稿にはない記述が11箇所認められ、逆に手稿から削除された部分が4箇所あるという。巻末には、大雑把なものではあるが、『手帳』全3巻を通じての索引が付され、『手帳1・2』の検索にも役立つようになっている。

ところで、『手帳1・2』はカミュ研究に、というよりもカミュに関する論文・解説書の生産に大きく寄与した。まず校訂者キイヨが、出版前に充分目を通せるという特権を利して、ブレイヤッド版カミュ作品集の解説執筆に当って基本資料として用いる。ついで、カミュ研究が最初の隆盛を迎える60年代前半という好時期に『手帳』が刊行され、研究者は争ってこれを引用した。作品の典拠を示す重要な断章、あるいは議論の論拠として好都合な断章は繰り返し引用され、『手帳1・2』は「虎の巻」として利用し尽くされた観がある¹⁾。

しかし、第1・2巻の刊行から30年近くを経た今、もはや『手帳』を典拠として作品を解明するという還元的手法は慎まなければならないだろう。逆に、『手帳』そのものが研究の対象とならなければならないはずである。作者が純然たる創作ノートとして位置付けていたのであれば、何の留保も付けずに議論の根拠として引用をしてよからう。しかし、例えば『ペスト』や『正義の人々』に関しては構想過程が辿れるほどの言及がある反面、『異邦人』や『カリギュラ』については異常なほど記事が乏しく、成立時期を巡る議論がもつれる原因となったのである²⁾。カミュが日記と考えていたならば、伝記作家にとってまたとない好材料になったはずである。だが、時期によって、比較的規則正しく記述されている部分とそうでない部分との差が激しすぎるうえ³⁾、日付の明記された断章が極めて少なく、また、日付のない断章の書かれた時期を推測しようにも、手がかりとなるような作家の日常に関する記述に乏しい。唯一の例外は、1946年のアメリカ旅行と49年の南米旅行の部分であり、これは旅行記としてまとまった体裁を成しているために、刊行者は『旅日記』と銘打って独立させ、1978年に別途出版した（したがって、『手帳2』が完全な姿

になるまでも14年間を要したのである)。このように創作メモ・日記・旅行記と異質な記事が混在しているばかりでなく、読書メモや単なる覚書としてもかなり利用されている3巻の『手帳』、というよりもこの9冊のノートは、カミュにとっていかなる意義を持っていたのだろうか。

一つの手がかりとなるのが、1935年から約24年間でわずかに9冊という、量の乏しさである。多弁の作家ではなかったカミュではあるが、発表した作品よりもノートのほうが分量が少ないという「逆ピラミッド」は、いかにも異常である。書くべき事柄を絞ったというならば、今指摘した内容の不均一と矛盾する。むしろ、カミュはノートに記すということを特殊な、貴重な行為と考えていたということではあるまいか。その根拠の一つとして、カミュの対外的な活動に関する記事が『手帳』の中には極めて乏しく、たまにあっても必ず個人的省察や創作のテーマに結び付けられているという点を上げておかねばなるまい。アルジェリア時代における共産党への入党と脱党、『アルジェ・レピュブリカン』紙などを通じてのアルジェリア総督府への批判に関しての何の言及もないのみならず、『コンバ』紙で健筆を奮っていた時期(抵抗運動の言論指導者という伝説が作られていった時期!)が『手帳2』において日付の上で著しい空白となっているのは、印象深い⁴⁾。カミュにとって、ノートに記す事柄というのはある内的な基準を越えた、特権的な事柄でなくてはならず、外的世界との繋がりを断ち切り自己のうちに沈潜する儀式が、ノートを書くという行為であったのではあるまいか。

むしろ、作家にとっての意義にかかわらず、『手帳』の第3巻はやはりカミュ晩年の9年間についての第一級資料として出版が待ち望まれていた。サルトルとの「論争」を巡るカミュの反応、謎に満ちた『転落』及び『追放と王国』の成立過程、作家としての再生を賭けて取り組んでいたとされる『最初の人間』などに関して、豊富な言及が期待されたのは当然のことであった。だが、『最初の人間』に関するわずか10数個の断章を除けば⁵⁾、この期待はほとんどかなえられなかったと言ってよい。「論争」や作品の成立過程に関する記述は、30年前にキイヨがプレイヤード版の解説で引いたものが実はほぼ全てであり、伏せられていた重要な断章などはほとんど見当たらないのである。もちろん、未発表だった興味深い記事としては、『最初の人間』における父親捜しのテーマを着想したのが1953年秋だったらしいことを告げる〈断章7—329〉(pp.96-7)⁶⁾、『転落』で描かれるオランダのイメージを最初につかんだのはハーグにおいてらしいことを窺わせる〈断章8—17〉(p.126)、ドン・ジュアン伝説とファウスト伝説とを混ぜ合わせた戯曲をかなり真剣に構想していたことを明かす数個の断章など⁷⁾、幾つもあげられる。しかし、創作ノートとしての性格が薄まり、作品研究の資料としての価値が低い(とりわけ『転落』の成立事情に関してはほとんど情報を提供しない)というのが、第1・2巻と比べた『手帳3』の特徴の第一であることに変わりはないのである。

このことは、1950年代に入ってカミュが苦しんだ創作力の低下と関わりがあらう。実際に執筆に取りかかる以前に、創作過程の上で最も気に入っていたという「啓示を受ける瞬間⁸⁾」そのものが減少していたのだと思われる。その結果、『手帳3』は内面的日記という性格を強めてゆくのだが、いかにカミュが自分と差し向かいになる特殊な時間と考えていたにせよ、創作に関して記すというのは、最終的に読者—他者へと開かれた行為である。それゆえ、他者へ向かう回路が減少した分、晩年のカミュにとってノートに記すという行為は、ただ自己に向かって語りかけるといった閉塞的な性格なものになっていったのではなからうか。

〈男も女も、誰も彼もが破滅させようとのしかかってくる。自分らの分け前を絶えず求めて。決して、決して手を差しのべてはくれず、助けに来てはくれず、あるがままの僕ゆえに愛してくれることはなく、あるがままの僕であり続けるために愛してくれることはなく[……]〉

(〈断章7—150〉, p.50)

このような赤裸々な告白は、『手帳2』まででは認められなかったものだ。カミュの文体は、自己規制の文体とでも名付けられるものだが、その規制ぶりはノートにまで及び、これまではあからさまな内面の吐露は避け、あるいはその衝動を創作メモへと昇華させてきた。しかし、第7ノートの中盤以降そうした規制

がゆるみ、『手帳』そのものが変質してゆくさまが読み取れるのである。

特に第9ノートに至り、形式も内容も、完全に内的な日記となる。日付が極めて規則的に記されるばかりでなく⁹⁾、それまではほとんど見かけなかった、一人称主語を省略した文体が頻出するのである。「この日記を付けようと努力している。しかし嫌悪感は強い。かつて日記を付けたためしのない理由が、今になってわかる。僕にとって、人生は秘密のものなのだ[……]。今日記を付けるべく努力しているのは、記憶の欠落に気付いてパニックに陥っているからだ」(〈断章9—11〉, p. 252-53)

しかし、なによりも『手帳3』における変化を明かす事柄としては、夢の描写、母親への言及、別れた最初の妻のこと、通常の内的日記なら記されて当然であるこういった記述が現われるのが『手帳3』に至って初めてである、という点を挙げておきたい。特に〈断章7—95〉は、カミュにおける死刑と自殺の強迫観念を考察する上で興味深い記述である。

〈午前2時。何年も前からお気に入りの二つの夢。そのうちの一つは、形は変わっても、いつも死刑執行の夢だ。今夜は、はっと目を覚ましたので、細かいところまでたくさん記せる。

死刑台へと歩いてゆく。(アルジェの友人)スコット・ラヴィナが付き添ってくれる。[……]子供たちが死刑台の上で待っている。その階段を上る。相変わらず取り囲まれ、急ぎ足で、手を縛られて、だと思う。[……]子供たちを抱き締めて泣く。初めてのことだ。子供たちはいつものように「じゃあね」と言ったように思う。[……]我々は階段を後にした[……]だが、ヴェーラが旧式のピストルを手にしていることが分かった。[……]銃身が長すぎたので、うまくピストルをこめかみにあてがうことができなかった。急いで引き金を引く。Aにも誰にも別れを告げなかったと思いながら[……]>

(p. 35)

なぜカミュが死刑の強迫観念を抱くに至ったか、従来は、『異邦人』でも語られている「父親が死刑執行を目の当たりにしたという話」を幼少期に聞き、衝撃を受けたことがその有力な理由とされてきた。しかし、作家の無意識を探索のではなく、作家の意識に沿って作品の成立を探索するという立場からは、もっと大胆な仮説が立てられよう。カミュが死刑囚のテーマを抱くに至ったのは(『異邦人』の着想よりもずっと早く、『手帳1』を信ずれば1937年頃のことだ)、死刑の夢を繰り返し見たからではないだろうか。夢が作品のヒントとなるのはごく自然な流れである。けだし、カミュの恩師ジャン・グルニエの言葉を借りれば、「物を書くというのは、自己の妄執に秩序を与えること¹⁰⁾」なのだから。

『裏と表』、『異邦人』、『誤解』……母と子の関わりというテーマがカミュ文学において中心的な位置を占めていることは、いまだ強調するまでもない。1935年、カミュが初めてノートに記した断章にしてからが、幼少年期における母親との関わりを主題に据えた小説的作品の創作メモだったのだ。「(貧しく育った場合に)息子が母親に対して抱く奇妙な感情が、その子の感性の全てをなす¹¹⁾。」ところが、その後の『手帳』に現われる「母親」は、いったん想像力のフィルターにかけられて小説あるいはエッセイのためのメモに書き止められる「la mère」であり、カミュは、現実の母親に対して「maman」と呼びかける記述を残すことはなかった。だが、この内的規制も『手帳3』において崩れるのである。1954年11月頃の〈断章8—45〉において初めて現実の「Maman」が記され、カミュは起こりうるその死に関して暗い思いを巡らす。1955年の夏、南仏に母親を呼び寄せたときの記事「母と僕は、その素晴らしい夜を、締めつけられるような同じ心で見つめる」(〈断章8—166〉, p. 190)。1959年3月、77歳になっていた母親がヘルニアで手術を受け、カミュは急遽アルジェに立つ。病床に横たわる母を見つめながら、作家は、暴漢に襲われた母親を一晩看病して特権的な時間を共有したという少年期の思い出(『裏と表』で描かれている)を想起していたのではあるまいか。「白い壁に何もかかっていない、純白の病室。何も無い。ハンカチと、小さな櫛が一つ。シーツの上の、節くれだった母の手」「母は何もできない。読むことも、指が利かないために針仕事も、口が利けないために聞くことも。時が流れる、重く、遅く……」「哀れな体、惨めで、汚れ、衰え、屈辱を受けた体。神聖な体」(〈断章9—41—44〉, pp. 262-263)『異邦人』のムルソーのように、死者を目の当たりにすることを避ければ物理的な「死」に直面せずに済む。同じように、齢を重ねる姿から目をそむ

けていれば、母親はいつまでも象徴的な母親に留まってくれるだろう。だがカミュは、内的世界の象徴であるノートに崩れゆく肉体を書き留めることで、母親を直視し、その向こうにある神々しさを垣間見たのである。

1934年に友人の恋人を奪うような形でシモーヌ・イエと結婚したカミュが、その後2年余りで結婚生活に破れたことからどれほど深い傷を負ったかは、つとに指摘されている。『裏と表』所収の「打ちひしがれて」で描かれている、夫婦の破綻が決定的になったあとプラハで陥った精神的な危機、『手帳1』で繰り返し言及され、『幸福な死』や『カリギュラ』の1939年稿に現われている「性的な嫉妬」のテーマ。『ペスト』のグランに具現されている、去っていった妻のテーマ。『異邦人』のムルソーがマリイに対して示す、男女の結び付きに対する斜に構えた姿勢などにも、作家の傷が反映しているだろう。しかしこの打撃に関しても、カミュは心の奥に沈める道を選び、ノートにシモーヌの名を記したり苦悩を直接綴ったりすることはなかったのである。

だが『手帳3』に入り、一方で『最初の間』の構想のためにごく若い頃の記憶を反芻したために、また他方で、おそらくは複雑な愛情問題が刺激となって、明らかにシモーヌを想起して書いたと思われる創作メモが散見されるようになる。〈断章8—82〉(p. 150)、『最初の間』の創作メモにおいて Simone という名が現われる。〈断章8—151〉(p. 184) で記される、最初の妻の戯画「大きく力強い手と、細く優雅な体の端についた、踊り子のような足[……]。買ったばかりのドレスを、起き抜けに見て楽しめるようにと、毎晩ベッドの端に掛ける[……]。彼女が関係を持った男ども。連中が、あの女には、人種が違うように見えるのだ[……]。」そして〈断章9—91〉、『手帳3』を閉じるこの断章における生々しい告白(現在の妻以外の女性に宛てられた告白)は、シモーヌから受けた傷でカミュがどれほど苦しんだかを窺わせて痛々しいと同時に、その傷を生涯引き受けた点で、一つの誠実さを感じさせずにはおかない。

くおまえが打ち明けてくれたことで苦しんだ。けれども、僕の悲しみゆえに悲しさを覚える必要はない。[……]生涯にわたって、僕に愛着を覚えてくれる人が現われるや、その人が尻込みをするようあらゆる手立てを尽くしてきたのだ。[……]初めて愛した人は、僕は忠実だったというのに、麻薬に溺れ、裏切りを働き、僕に背いた。たぶんそれが多くのことの原因となったのだろう、虚栄心ゆえに、さらに苦しむことを恐れるがゆえに。それでも多くの苦しみを受け入れたのだが。けれどもそれ以来、今度は僕の方で皆に背いた。そして、いわば誰もが背いてくれるよう望んだのだ。[……]だから、おまえが背いてくれるよう、あらゆる手立てを尽くしたのだ。そして、過ぎ去ったこの九月の魅惑が素晴らしいものであればあるだけ、魅惑といったものを断ち切ろうとしたのだ。[……]ときおり、愛することができない人間だと自らを責めることがある。おそらくその通りなのだろう。けれども、幾人かを選ぶことはできたし、その人達が何をなさうが、僕のうちに最良のものを取っておいてあげることはできたのだ。>

(p. 279-80, 強調はカミュ)

『手帳3』が出版されてからしばらくして、ラジオの France Culture の討論番組がこの本を取り上げた。そこでもやはり、出席者の一人が盛んに《honneteté》という言葉を繰り返していた。確かに、『手帳3』が創作ノートから内的な告白の書へと変質したにもせよ、その告白を貫く誠実な声音が、われわれ打ち明け話の聞き手の胸を打つのである。

カミュの『手帳』を論文生産のための資料集として扱いたい研究者にとっては、作品研究に役立つ材料に乏しいこの第3巻は期待外れだろう。カミュの伝記研究に興味を持つ者、あるいはカミュ個人に愛着を覚える読者にとってこそ、意味を持つ本かもしれない。しかし、『手帳3』はそうした少数の読者を越えた広がりを持ち得ない、間口の狭い書物でしかないとは思われない。フランス文学に脈々に流れている告白—日記文学の伝統の中で然るべき位置を占める文学作品として、捉えることが可能ではないだろうか。

註

- 1) 例えば、カミュの研究・概説書としては最新のものに属する François CHAVANES, *Albert Camus : <Il faut vivre maintenant>* (CERF, 1990) や Joseph HERMET, *À la rencontre d'Albert Camus* (Beauchesne, 1990) でも、『手帳』を無批判に引用するという傾向に変わりはない。
- 2) 例えば、ブレイヤッド版におけるキヨの解説を初めとして、『幸福な死』の創作メモを『異邦人』のものを取り違え、そこから『異邦人』の早期着想説を導き出した議論が多かった。
- 3) 例えば『手帳3』においても、断章8—149から8—162の間で、1955年の1月から7月へと日付が半年も跳んでいる。
- 4) 『手帳2』, p.126 前後を参照。
- 5) 断章7—329 (pp. 96-97), 7—337 (p. 100), 7—393 (p. 114), 8—62 (p. 142), 8—75, 76, 77, 79, 80, 82 (pp. 148-50), 8—90 (pp. 153-54), 8—125 (p. 176), 8—131, 132 (pp. 177-78), 8—142 (p. 182), 8—149 (p. 183), など。
- 6) 以下、断章番号をくノートの番号—そのノートにおける断章の順番という形式で記す。なお、『手帳』の原書では各断章はアステリスクで分けられているのみで(手稿では、写真で見る限りアステリスク記号もない)、断章番号は付されていない。本書評内の断章番号は、すべて筆者が個人的に数えたものである。
- 7) 断章8—376 (p. 110), 9—81, 83 (pp. 150-51), 9—153 (pp. 186-7), 8—212 (p. 212) など。
- 8) 「ジャン・クロード・ブリスヴィルに答える」(ブレイヤッド版エッセー篇, p. 1921) 「あなたの執筆方法はどのようなものですか?—ノート、紙切れ、ぼんやりとした夢がまず最初で、それが何年も続きます。ある日、着想が構想が訪れ、こうしたばらばらの細部をつなぎ合わせます。そうして、整理してまとめるという長く苦しい作業が始まるわけです[……]」
- 9) 第8ノートでも規則正しく日付が付されている部分があるが、これは1955年と、58年、二度にわたるギリシア旅行の期間のもので(断章8—98~117, 8—293~314), 前述のアメリカ・南米旅行の部分と同様、独立した旅行記の性格をもっている。この、長いこと憧れていたギリシア旅行に関する部分は、全般に暗い色調の『手帳3』にあって、例外的に生命力に富んだ記述となっている。『転落』のクラマンズと同様、ギリシアにおいてカミュは精神的な蘇生を体験したと思われる。「水平線には、シロスと他の島々が描かれる。全てが、空を背景に幾何学図形の明瞭さで描かれる。島々のひっくりかえった船底には、小さな村々が貝殻のように斜面にへばり付いている……」(断章8—110, p. 168)
 また、日付の付いた記事で興味深いのは、アルジェリア問題を巡ってカミュが実際にド・ゴールと会談したことを示す(これまでは、その可能性が指摘されただけだった)、断章8—266 (p. 216)。しかし会談の内容そのものは実り薄かったらしく、カミュは詳しい記述を残していない。
- 10) Jean GRENIER, *Albert Camus —souvenirs—*, Gallimard, p. 19.
- 11) 『手帳1』, p. 15.